

切手・葉書にみる バレリーナの肖像 (2) —— タマラ・カルサヴィナ 生誕 130 周年記念 ——

展示期間 /
2015年2月1日(日)~2015年3月19日(木)
企画・構成 /
関典子 (薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

切手・葉書にみるバレリーナの肖像

「薄井憲二バレエ・コレクション」より、切手と葉書のシリーズ 第2回をお届けします。

切手という小さな紙片の上で展開するバレエの世界、スターの肖像に身近に触れることを可能にした葉書の魅力。これらは、バレエが生活においても価値を置かれていることの証とも言えるでしょう。

手から手へ渡り、海や空を越えて………いったいどんな人々の手を経て、ここに来たのでしょうか。想像力の翼を広げると、バレエを愛する人々のぬくもりを感じられるような気さえます。

出展リスト

- ◆『火の鳥』葉書 自筆サイン入り (フランス 1919年)
- ◆『火の鳥』葉書 アドルフ・ボルムと共に (イギリス 1912年)
- ◆『火の鳥』葉書 肖像画 (パリ 1992年)
 - * ジャック・エミール・ブランシュによる肖像画は 1910年に制作
- ◆『火の鳥』切手 キーロフ・バレエ団 (タンザニア 1990年代)
- ◆バレエ・リュス 切手 4枚組 (ロシア 1995年)
 - * ミハイル・フォーキン肖像画 『シエラザード』『火の鳥』『ペトルーシユカ』
- ◆『フェアリー・ドール』『スペイン人形』葉書 (ロシア 1910年)
- ◆『フェアリー・ドール』『スペイン人形』葉書 (ロシア 1904年)
 - * レオン・バクストによる衣装デザインは 1903年に制作
- ◆『レ・シルフィード』葉書 自筆サイン入り (ドイツ 年代不詳)
- ◆『薔薇の精』葉書 バレエ・リュス ポスター (イギリス 1996年)
 - * ジャン・コクトーによる原画は 1911年に制作
- ◆葉書 5枚組 デッサン・陶器・詩 (ロシア 1980年代)
- ◆自伝『劇場通り』(イギリス 1948年)
 - * 邦訳『劇場通り』東野雅子訳 新書館 1993年

タマラ・カルサヴィナ (Tamara Karsavina 1885~1978)

1885年3月9日、ペテルブルグ生まれ。帝室バレエ団(マリンスキー劇場)およびバレエ・リュスで長年活躍した、20世紀初頭のロシアを代表するスターダンサー。

ダンサー・バレエ教師の父、哲学者の兄の影響のもと、幼少期から教養を深め、帝室バレエ学校を首席で卒業。1902年、17歳で帝室マリンスキー劇場デビューを果たし、その後プリマとして、1918年まで在籍した。1909年からはセルゲイ・ディアギレフ率いるバレエ・リュスにも参加。パリの観客は、定冠詞付きの「ラ・カルサヴィナ」として彼女を讃えた。一時期ミハイル・フォーキンと恋仲だったこともあり、フォーキン振付の『レ・シルフィード』(1909)、『火の鳥』(1910)に主演、『薔薇の精』『ペトルーシユカ』(1911)では、伝説のダンサー、ワツラフ・ニジンスキーの相手役を務めている。入れ替わりの激しいバレエ・リュスの中で、デビューから終焉まで重要な役割を演じ続けたのはカルサヴィナただ一人であり、ディアギレフの信頼を一身に受け、同団の成功に大いに寄与した。

ロシア革命勃発後、1918年に英国人外交官の夫ヘンリー・ブルースと共にイギリスに移住、1978年に没するまで、二度と祖国に帰ることはなかった。亡命後もバレエ・リュスの舞台に立ち続け、1929年の同団解散後は、かつて『春の祭典』で振付助手を務めたマリー・ランバートが創設したイギリス初のバレエ団バレエ・クラブ(後のバレエ・ランバート)にゲスト出演。1931年の引退後は後進の育成に努め、英国ロイヤルバレエ団の創設にも尽力。1955年『火の鳥』再演に際しては、マーゴ・フォンティーンを指導するなど、バレエ・リュスと英国バレエの橋渡しとして、大きな役割を果たした。

文筆活動にも精力的で、『バレエ・テクニク』(1956)、『クラシック・バレエー動きの流れ』(1962)などの理論書、前半生をつづった自伝『劇場通り』(1929)を出版。尚、この自伝はディアギレフの死(1929年8月19日)の翌日に完成し、カルサヴィナはこの日に、彼の訃報を受けたという。祖国ロシアのバレエを愛し、知性と技術と表現力を兼ね備えた、華麗なるバレリーナである。



兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町 2-22

tel: 0798-68-0223 fax: 0798-68-0212

※ 禁無断転載・複製・引用